

群 教 セ	G05 - 08
	平17.228集

思いや願いを表現する絵画指導の工夫

— 自分を見つめる活動を取り入れた自画像の制作 —

特別研修員 長塩 桂子 (渋川市立古巻中学校)

《研究の概要》

本研究は、自分を見つめる活動を取り入れた自画像の制作を通して、自分の思いや願いを表現できるような絵画指導の工夫を行ったものである。具体的には、生徒が自分の性格や今の気持ちなどをもとに色彩と表現技法を選んで抽象的な下地をつくり、その下地の上に観察をもとにした下描きと彩色を行うといった抽象的表現と観察をもとにした表現を組み合わせた自画像を制作する活動を行った。

キーワード 【美術—中 思いや願い 絵画 抽象的表現 観察 自画像】

I 主題設定の理由

[生きる力]を育てる観点から、美術教育では、生涯にわたり美術を愛好できる基礎的能力を育てることをより重視するようになった。そうした能力は、自分の思いや願いを表現する喜びを味わうことによってはぐくまれる。つまり、美術教育の表現の本質は、生徒が自分を見つめ、思いや願いを表現することにあると考える。

こうした流れを受け、群馬県では、「つくりだす喜びを実感できるような題材の構想と指導の工夫」を美術教育の重点事項に掲げている。「つくりだす喜び」は、自分の思いや願いを表現することができたと実感したときに得られるものである。そのために教師は、生徒が自分の表現意図に適した方法で、主体的に思いや願いを表現できるような題材を構想しなければならない。

本校でも、課題に対して主体的に取り組む能力を育てたいとして、教育活動に取り組んできた。しかし、明るく活動的な生徒が多いものの、学習意欲や態度に個人差が大きく、授業では、指示待ちの傾向がある。美術の授業でも、制作を楽しむことはできるが、模倣や他者からの助言に頼り、自ら考え、工夫するといった主体的な取組は、苦手な生徒が多い。

これまでに3年生は、自分の靴や学校の中庭などの身近なものを見つめ、絵に表してきた。多くの生徒は、表現技法の習得に興味をもち、真面目な制作態度であった。しかし、自分の思いや願いを表現することよりも、「いかに上手く表せたか」といった技能面に目が向きがちであった。そのた

め、技能に自信がもてない生徒は、表現の喜びを味わうことができず、表現意欲を失ってしまうこともあった。こうした問題を解決するためには、制作に臨んで、生徒が自分を見つめ、表現意図を明らかにすることが必要である。また、教師は、生徒が表現の工夫やよさを実感し、その喜びを味わえるような題材を構想しなければならない。

そこで、本研究では、生徒がより自然に自分を見つめられる題材として、「抽象的表現と観察をもとにした表現を組み合わせた自画像」を構想した。まず、生徒は、自分の性格や今の気持ちにふさわしい色彩と表現技法を選び、表現意図を明らかにする。そして、色彩と表現技法を生かして、抽象的な下地をつくる。これは主に、自分の内面を見つめる活動である。次に、下地にこめた表現意図を生かしながら、観察をもとにした下描きと彩色を行う。生徒は、表現意図に適した表情や色彩を考え、観察をもとに描くことによって、表現を工夫しそのよさを実感することができる。これは主に、自分の外面的な特徴を見つめる活動である。

以上のように、自画像の制作に自分の内面と外面を見つめる活動を取り入れることによって、生徒が自分の表現意図を明らかにして、思いや願いを表現することができると考え本主題を設定した。

II 研究のねらい

自画像の制作において、自分を見つめる活動を取り入れ、抽象的な下地と観察をもとにした表現

を組み合わせることによって、思いや願いを表現することができることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 下地づくりの場面において、自分を見つめ、表現意図を明確にして、自分の性格や今の気持ちを表すのにふさわしい色彩と表現技法を選択して制作すれば、自分の内面を表す抽象的な下地をつくることができるであろう。
- 2 下描きの場面において、自分の性格や今の気持ちを表す表情や画面構成を考え、観察をもとに頭部のつりあいや立体感をとらえて描けば、自分の特徴を表すことができるであろう。
- 3 彩色の場面において、下地や下描きを生かす配色を考え、観察をもとに水彩画の基礎技法を生かして色を塗れば、思いや願いを表現する自画像を制作することができるであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 研究の内容

(1) 思いや願いを表現する絵画指導

本研究でいう「思いや願いを表現する絵画指導」とは、生徒が自分を見つめて、表現意図を明らかにしながら、心の中に生まれたイメージや願望を絵に表現できるようにする指導である。また、本研究では、性格や今の気持ちなどの内面と鏡に映る外面的な特徴の両方を見つめられるように、自画像を取り上げる。生徒は、自分自身を内側と外側の両面から見つめることによって、自分に対する様々なイメージや、こうありたいという願望などを意識する。こうして生まれたイメージや願望を「思いや願い」と考え、抽象的な下地の表現と観察をもとにした人物表現を組み合わせることによって表現できるようにすることを目指している。

(2) 自分を見つめる活動を取り入れた自画像の制作

自画像の制作における「自分を見つめる活動」とは、生徒が自分自身を内側と外側の両面から見つめ、表現意図を明らかにして、抽象的な下地の表現と観察をもとにした人物表現を組み合わせ

表現する活動である。具体的には、次の三つである。

ア 色彩と表現技法を選択して下地を制作する活動

まず、カラーコミュニケーション（言葉、会話によらず色彩によってメッセージを伝える相互作用）の考え方を知り、自分の性格や今の気持ちにふさわしい色彩（自分色＝identity color）を発見する。そして、2年次に学んだモダンテクニック（現代美術が生み出した様々な造形表現技法のこと）を生かして試作を行い、自分の性格や今の気持ちにふさわしい表現技法を探る。その後、自分色とモダンテクニックを生かして、抽象的な下地をつくる。このように、色彩と表現技法を通して自分の性格や今の気持ちを見つめ、表現意図を明らかにして制作する活動である。

代表的なモダンテクニック

スパッタリング	ブラシと金網を使った霧状のぼかし
ドリッピング	絵の具の流れ落ちるような表現
マーブリング	墨流し状の模様を紙に吸い取らせた表現
スタンピング	型に絵の具をつけて押しつけた表現

イ 下地を生かし観察をもとに下描きをする活動

まず、鏡に自分の顔を映して様々な角度から観察し、自分の性格や今の気持ちを表す表情を考える。次に、下地のどの部分にどのくらいの高さで自分の顔を描くかといった画面構成を考える。そして、鉛筆で測ったり、手で触って確かめながら、頭部のつりあいや立体感をとらえて下描きをする。このように自分の性格や今の気持ちをもとに表情や画面構成を考え、観察をもとに外面的な特徴を描く活動である。

ウ 下地を生かし観察をもとに彩色する活動

まず、下地の色調や下描きの表情にふさわしい配色を考える。次に、自分の選んだ色彩を用いて下塗りと明るい部分の彩色を行い、配色の効果を確かめる。さらに、立体感や明るさの変化を詳しく観察し、水彩画の基礎技法を生かして色を塗る。このように、下地や下描きを生かした配色を考え、観察をもとに色を塗り、思いや願いを表現する自画像を制作する活動である。

2 研究の方法

(1) 授業実践計画

対象	渋川市立古巻中学校 3年3組 28人
題材名	自己を見つめて（自画像）
期間	平成17年6月～10月（自画像・13時間計画）

抽出生徒	<p>A：美術に対する興味・関心が高く、描写力に優れ、意欲的に取り組むことができる。反面、技能面にこだわるあまり、表現意図が曖昧になりがちである。自分を見つめ、表現意図を明らかにして制作し、思いや願いを表現できるようにしたい。</p> <p>B：取りかかりがはやく、表現を楽しむことができる。反面、その場の思いつきで制作を進めがちであり、意欲を持続することが苦手である。下地を生かしながら、観察をもとに表現を工夫し、そのよさを味わいながら、自分の特徴を表せるようにしたい。</p> <p>C：美術に対する興味・関心があり、課題には真面目に取り組むことができる。反面、発想や構想の能力はやや乏しいため模倣を好み、表現の工夫にも欠ける傾向がある。表現意図を生かす配色を考え、観察をもとに彩色方法を工夫し、自己表現の喜びを味わいながら彩色できるようにしたい。</p>
------	--

(2) 検証計画

	検証の観点	検証の方法
見通し1	下地をつくる場面において、自分の性格や今の気持ちをもとに選んだ色彩と表現技法を活用して制作することは、表現意図を明らかにし、自分の内面を表す抽象的な下地をつくるのに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 自己評価表 活動観察 下地完成作品
見通し2	下描きをする場面において、自分の性格や今の気持ちを表す表情や画面構成を考え、観察をもとに頭部のつりあいや立体感をとらえて描くことは、自分の特徴を表すことに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 自己評価表 活動観察 下描き完成作品
見通し3	彩色を開始する場面において、下地や下描きを生かす配色を考え、観察をもとに水彩画の基礎技法を生かして色を塗ることは、思いや願いを表現する自画像を制作することに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価表 活動観察 彩色途中の作品 彩色完成作品

V 研究の展開

1 題材名 自己を見つめて（自画像）

2 目標

自分を内側と外側の両面から見つめ、表現意図を明らかにして、抽象的な下地と観察をもとにした人物表現を組み合わせ、自分の思いや願いを表現する自画像を制作する。

3 評価規準

美術への関心・意欲・態度	・自分を内側と外側の両面から見つめ、表現意図を明らかにして、表現の工夫やよさを実感し、思いや願いを自画像で表現しようとする。
発想や構想の能力	・自分の内面を見つめて抽象的な下地の構想を練り、自分の外面的な特徴を観察して、表現意図に適した下描きや彩色の構想を練ることができる。
創造的な技能	・自分の性格や気持ちにふさわしい色彩と表現技法を用いて抽象的な下地をつくり、観察をもとに頭部のつりあいや立体感をとらえて外面的な特徴を描き、水彩画の基礎技法を生かして表現意図に適した彩色を行い、思いや願いを表現する自画像を制作することができる。
鑑賞の能力	・参考作品や友達の作品の表現意図を理解し、自他の作品の工夫やよさに気づき、自己表現の喜びを味わうことができる。

4 指導と評価の計画（全13時間予定）

過程	時間	主な学習活動	学習活動の具体的評価規準 □は評価方法	支援及び指導上の留意点
発想・構	1	<p>【見通し1】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分を見つめ、自分の性格や今の気持ちなどにふさわしい色彩、「自分色」を選ぶ。 自分色とモダンテクニックを用いて試作を行い、 	<ul style="list-style-type: none"> 色彩と表現技法の効果に興味をもち、自分を見つめ、性格や今の気持ちを考えようとしている。＜関心・意欲・態度＞ 自分の内面を表すのにふさわしい配色や表現を発想し、色彩 	<ul style="list-style-type: none"> 色彩の選択に際してカラーコミュニケーションの考え方を紹介し、数色の自分色を選ぶよう伝える。 自分色とモダンテクニックを用いて試作を行い、配色や表現の効果を確認めることを、OHCを活用した実演を通して伝える。

表 現	想	自分の内面を表す表現技法を選ぶ。	と表現技法を効果的に用いて、試作に表すことができる。 ＜発想や構想の能力＞ 活動の様子、ワークシート		
	2	・自分色とモダンテクニックを用いて、自分の内面を表す抽象的な下地をつくる。	・表現意図を明らかにして、色彩と表現技法を生かし、下地をつくろうとしている。 ＜関心・意欲・態度＞ ・試作での工夫を發展させながら、自分の内面を表す抽象的な下地をつくることができる。 ＜創造的な技能＞ 活動の様子、自己評価表 下地の完成作品	・同級生の参考作品を提示し、試作での工夫を發展させられるよう具体例をもとに助言する。 ・個別支援を通して、配色や表現のよさを認め、自信をもって表せるようにする。 ・配色や表現のよさが表れない場合は、美しく見える配色例や他の表現技法と組み合わせること等を参考作品や実演を通して紹介し、表現の工夫が行えるようにする。	
表 現	4	発 想 ・ 構 想	【見通し2】 ・自分の性格や今の気持ちにふさわしい表情と画面構成を考える。 ・観察をもとに頭部のつりあいや立体感をとらえ、自分の特徴を表した下描きをする。	・自分の性格や今の気持ちにふさわしい表情と画面構成を考慮することができる。 ＜発想や構想の能力＞ 活動の様子、ワークシート ・観察しながら特徴を意図的に描こうとしている。 ＜関心・意欲・態度＞ ・観察をもとに頭部のつりあいや立体感をとらえ、自分の特徴を描くことができる。 ＜創造的な技能＞ 活動の様子、自己評価表 下描き完成作品	・自分の性格や気持ちに適した表情が考えられるようにするため、画家の自画像を提示し、角度によって表情が異なることを伝える。 ・参考作品を提示し、表情や画面構成の効果を具体例をもとに伝える。 ・鏡と鉛筆を使って部分と全体のバランスを見る方法や手で触って面をとらえる方法を実演し、頭部のつりあいや立体感を意識しながら描くよう伝える。 ・個別支援を通して、表現の工夫やよさを認め、自信をもって表せるようにする。 ・表現の工夫やよさが表れない場合は、頭部のつりあいや立体感をとらえる方法を個別指導し、表現の工夫が行えるようにする。
		発 想 ・ 構 想	【見通し3】 ・下地の色調や下描きの表情にふさわしい配色を考え、下塗りより明るい部分の彩色を行い、配色の効果を確かめる。 ・観察をもとに、水彩画の基礎技法を生かして暗い部分の彩色を行い、大まかな立体感を表す。 ・観察をもとに、水彩画の基礎技法を生かして明暗の中間部分や細部を彩色し、自画像を仕上げる。	・彩色に興味をもち、下地の色調や下描きの表情にふさわしい配色で表現しようとしている。 ＜関心・意欲・態度＞ ・下地の色調や下描きの表情にふさわしい配色を考慮することができる。＜発想や構想の能力＞ ・下塗りより明るい部分の彩色を行い、配色の効果を確かめながら色を塗ることができる。 ＜創造的な技能＞ 活動の様子、自己評価表 彩色途中作品 ・観察をもとに、水彩画の基礎技法を生かした彩色を行い、表現のよさを味わいながら、思いや願いを表現する自画像を制作することができる。 ＜創造的な技能＞ 活動の様子、自己評価表 彩色完成作品	・下地の色調や下描きの表情にふさわしい配色を考えられるよう、参考作品を提示し、配色の効果を伝える。 ・下塗りの淡彩と明るい部分の彩色によって、配色の効果を確かめるよう、OHCを活用した実演を通して伝える。 ・個別支援を通して、表現の工夫やよさを認め、下描きから下塗りへ自信をもって進められるようにする。 ・表現の工夫やよさが表れない場合は、配色や表したいイメージについて対話や実演等を通して個別指導し、下描きから下塗りへ進められるようにする。 ・水彩画の基礎技法を生かして暗い部分を彩色し、大まかな立体感を表すよう、OHCを活用した実演を通して伝える。 ・個別支援を通して、表現の工夫やよさを認め、下塗りから色調を強める彩色へ自信をもって進められるようにする。 ・表現の工夫やよさが表れない場合は、混色の方法や水の量等について参考作品の提示や実演を通して個別指導し、下塗りから色調を強める彩色へ進められるようにする。

	<ul style="list-style-type: none"> ・水彩画の基礎技法を生かして仕上げの彩色ができるよう、参考作品を提示し、色彩や表現方法のよさを紹介する。 ・個別支援を通して、彩色のよさを認め、個に応じた助言を与えることによって表現のよさを味わえるようにする。 ・彩色のよさが表れない場合は、水彩画の基礎技法について参考作品の提示や実演を通して個別指導し、表現の工夫ができるようにする。
--	--

VI 研究の結果と考察

1 下地をつくる場面において、自分の性格や今の気持ちをもとに選んだ色彩と表現技法を活用して制作することは、表現意図を明らかにし、自分の内面を表す抽象的な下地をつくるのに有効であったか

下地づくりの導入時には、自分にふさわしい色彩と表現技法を確認し、表現意図を明らかにするため、ワークシートの記入を行った。ワークシートには、自分が選んだ色と表現技法をまとめた。生徒は、ワークシートの記入をしっかりと行い、自分の性格や気持ち、どのような技法を使って表したいかを書くことができた。

授業の開始時には、本時の学習内容として「自分にふさわしい色彩と表現技法を活用して、自分の内面を表す下地を完成させる」ことを参考作品の提示を通して伝えた。

制作中は、生徒一人一人に対して、「どんなイメージを表したいですか」「そのためにどんな色彩や技法を使っていますか」等の声かけを行い、本時のねらいが意識できるようにした。教師の問いかけに対して生徒は、自分のイメージを説明したり、悩んでいることや迷っていることを質問したりして、素直に自分の表現意図について話していた。このように制作中は、教師との交流を通して自分の内面を表す方法を探り、熱心に取り組む生徒の姿が見られた。

制作後の自己評価では、三段階の評価で最もよい二重丸にするしをつけた生徒が半数以上であった。教師の評価でも、自分の内面を美しい下地として仕上げられた生徒は全体の4割程度であった。表現力の差はあるものの、授業終了時には、生徒全員が下地をつくることができた。

Aは、ワークシートに自分が選んだ色とその色が表現することを短い言葉ながらもしっかりと記入し、3種類の技法を用いてどんな風に表したい

かアイディアスケッチとして描くことができた。ワークシートの記述からは、「神秘的で創造力にあふれた自分でありたい」というAの気持ちを見取することができる(資料1)。

資料1 Aのワークシート(部分)

1. 自分色が表現することを表にまとめてみましょう

項目	選んだ色	その色が表現すること
性格	藍色	神秘的
気持ち	孔雀	感情が素直
願い	水色	創造力
仲間から	白	個性的
その他	原色、こん	神秘的、知的的

前時にAは、「失敗したので新しい画用紙をください。」と教師に訴えていた。そこで、失敗と決めつけず、他の色彩や技法を重ねて用いるよう参考作品をもとに助言した。するとAは、木の葉に色を塗り画面に押しつけてその形を写し取り、額縁のような表現を行い始めた。教師は再び、自然物を用いた参考作品を示し、木の葉を用いた表現のよさを認め、励ました。支援を受けたAは、より意欲的に取り組み、黒に近い紺とやや渋い緑を用いて落ち着いた下地を仕上げることができた(資料2)。制作後、Aは、自己評価表の感想欄

資料2 Aの下地完成作品



に、「スタンプングを使ってよくできた。」と記入し、自分の表現に満足していた。結果的に、当初用いていた色彩とはやや異なった作品になったものの、落ち着いた色調と画面に直接木の葉を押しつけた力強さは、Aの思いに合った表現となった。

以上のように、生徒は、自分の性格や気持ちを素直に見つめ、色彩と表現技法を活用し、表現意図を明らかにしながら、自分の内面を表す抽象的な下地を仕上げる事ができた。特に、カラーコミュニケーションに対する生徒の興味・関心が高く、自分の内面を見つめるために、色彩の選択は有効であった。

2 下描きをする場面において、自分の性格や今の気持ちを表す表情と画面構成を考え、観察をもとに頭部のつりあいや立体感をとらえて描くことは、自分の特徴を表すことに有効であったか

下描きの導入時には、下地を生かし、画面のどの部分にどのような表情で、自分自身を描くかといった画面構成を考えるよう伝えた。また、画家の自画像を例に、顔の角度によって表情が異なることを示した。生徒は、表現意図に適した表情を考えて、ワークシートに簡単なアイデアスケッチを描いた(資料3)。

資料3 Aのアイデアスケッチ

3. 下地のどの部分にどのような表情で自分を描いたらよいでしょうか。思いや願いを表すことを考えて、簡単なスケッチを描いてみましょう。



授業の開始時には、本時の学習内容として「頭部をとらえ、頭髪だけでなく耳や首等も描いて下描きを完成させる」ことを板書や参考作品の提示を通して伝えた。また、鏡と鉛筆を利用した観察方法を実演を通して説明した。生徒は、各自の進度に合わせた自己目標を記入し、教師の実演を真似ながら説明を聞いて、観察をもとにした表現を意識していた。

制作中の生徒は、描くことに夢中になるあまり、観察がおろそかになりがちであった。そこで、個別指導を通して、生徒の描いた形と実際の形の違いを示し、観察の方法を助言した。そうした助言を受け、生徒は、頭部のつりあいを鉛筆で測ったり、手で触ることによって立体感を感じながら表現するようになっていった。このように、観察して描くことによって、形が修正され、外面的な特徴が生徒の作品に表れてきた。そこで、一人一人

の表現のよさを認め、励ましながら「納得がいかない部分はありませんか」と尋ね、ともに解決方法を考え、生徒が表現の工夫やよさを意識できるようにした。生徒は、外面的な特徴が自分の作品に表れてきたことを友達や教師との交流を通して確かめ、意欲的に下描きを進める事ができた。

制作後の自己評価では、ほとんどの生徒が三段階の評価で最もよい二重丸にするしをつけた。教師の評価では、下地を生かし外面的な特徴をとらえて美しく描けた生徒は、全体の4割程度であった。観察力や描写力の差はあるものの、授業終了時には、生徒全員が下描きを仕上げる事ができた。

資料4 Bのワークシート(部分)

1. 自分色が表現することを表にまとめてみましょう

項目	選んだ色	その色が表現すること
性格	紫	人とちがっていたい
気持ち	アブルグリン	挑戦が好き
願い	白	消極的な考えを打ち消したい
仲間から	黒	買性的
その他		

Bは、自己目標を「しっかり彩色に入れるように仕上げたい」とし、下描きの最終段階であることを意識して、意欲的に制作を始める事ができた。Bは、下地にこめた「挑戦することが好き、消極的な考えを打ち消したい」(資料4)という気持ちをもとに、下地の強い色彩に自分の顔が包み込まれるように画面構成を工夫し、まっすぐ前を向いた真剣な表情を描いていた。Aは、授業の前半は集中して取り組んでいたが、頭部をほぼ描きあげた段階で集中力が続かなくなり、友達との雑談に時間を費やしがちになった。そこで、Bの

意欲を喚起するため、

資料5 Bの下描き完成作品



今までの表現の工夫やよさを認め、集中して作品を仕上げるよう声をかけた。また、鏡にBの姿を映しながら、首の太さやワイシャツの襟との関係を観察して描くよう助言した。するとBは、授業終了時まで集中して取り組み、下描きを完成させ

ることができた（資料5）。

制作後、Bは、自己評価表の感想欄に、「首や襟もバランスよくとれて、彩色に入れる」と記入し、工夫して描いた部分の表現のよさを感じていた。また、Bは、「本物よりかっこよくなった」と照れながらも、観察をもとにして、頭髮のボリュームや首と肩とのつながりをよくとらえられたことを教師や友達と語り合っていた。その際、引き締まった顔つきが強調されたことを実感し、Bは、うれしそうな表情を見せていた。

Aは、ゴッホの自画像に感銘を受け、同じようにやや左を向き唇を固く結んだ表情を、鏡に映して描き始めた。また、下地の額縁のような表現を周囲に残しつつ、画面いっぱい堂々と自分の姿を取り入れた。Aは、頭部のつりあいを比較的正確にとらえていたが、鼻や口元の立体感はなかなかとらえられずに苦心していた。そこで、鼻筋を通る正中線が見る角度によって左にずれてくることをよく観察するよう助言した。また、鏡に自分の姿を映しながら鼻や唇を手で触り、視覚と触覚を同時に使って観察するとよいことも、教師が実演しながらAに伝えた。その後、Aは、観察をもとに、鼻や口元の立体感を粘り強く表現し、納得のいくまで何度も描き直して、下描きを完成させることができた。制作後、Aは、自己評価表の感想欄に「鼻の立体感がよくできました」と記入し、苦心して描いた下描きに満足していた。

以上のように、生徒は、自分の性格や今の気持ちを表す表情と画面構成を考え、観察をもとに頭部のつりあいや立体感をとらえて表現することができた。その結果、生徒は、表現の工夫やよさを感じながら、意欲的に自分の特徴を表すことができた。特に、生徒が立体感を実感しながら外面的な特徴を表すためには、視覚と触覚を同時に使う観察方法が有効であった。

3 彩色をする場面において、下地や下描きを生かす配色を考え、観察をもとに水彩画の基礎技法を生かして色を塗ることは、思いや願いを表現する自画像を制作することに有効であったか

彩色の導入時には、下地や下描きを生かす配色を考えるよう伝えた。その際、類似や対照、寒色や暖色といった配色の効果を生かした参考作品を提示しながら説明した。生徒は、同級生の参考作品に興味をもち、どのような配色でどんな風に表現したいかを真剣に考えていた。また、下塗りとは明

るい部分の彩色を行い、配色の効果を確かめることを、OHCを活用した実演によって伝えた。生徒は、教師の実演に興味をもち、表現方法についての説明を落ち着いて聞くことができた。

生徒は、授業の開始時に、自己目標を立て、「どのような色彩や配色でどんな風に表現したいか」を記入した。生徒の自己目標には、「暖色を使って、活動的な感じを表現したい」「下地と似た色を使って、まとまりのある感じにしたい」といった記述が見られた。

次に、生徒は、淡い色で下塗りを行い、配色の効果を確かめた。下塗りの進み具合に個人差はあるものの、生徒全員が下塗りを行い、表現意図に適した彩色を始めることができた。

制作後の自己評価では、三段階の評価で最もよい二重丸にするしをつけた生徒が半数以上であった。また、自分のイメージした配色で彩色できたことや、今まで以上に制作が進められたことが成果として記されていた。教師の評価では、下地や下塗りを生かす配色で、美しく色を塗り始めることができた生徒は、全体の4割程度であった。

Cは、自己目標を「緑色で塗りた

資料6 Cの下塗り完成作品



いと思う」とし、色彩のイメージをもつことができた。制作には集中して取り組み、自己目標に従って、淡い黄緑を肌に塗り始めた。そこで、観察をもとに顔面の凹凸や明暗を意識して筆を動かすよう、教師の実演を通して説明した。するとCは、鏡に映った自分の

顔を真剣に見つめ、面の違いや明るさの変化を丁寧な筆の動きで表していた。その後もCは、集中して制作し、下塗りを完成させた。下塗りの完成したCの作品は、下地の色調と似た類似色で塗られ、穏やかな雰囲気を表すものとなった（資料6）。

この下塗りを生かして、Cは、下地にこめた「優しい性格」「持久力を回復させたい」（資料7）

資料7 Cのワークシート(部分)

1. 自分色が表現することを表にまとめてみましょう

項目	選んだ色	その色が表現すること
性格	青	やさしい所
気持ち	赤色	分析がある
願い	赤	人ごみに立つ、体の持久力の回復
仲間から	青豆	自分が行動が思いがた
その他		

という気持ちをその後の彩色でも表現していった。Cは、重色や混色といった水彩画の基礎技法を工夫して用いていたが、表情のポイントとなる目や口元の仕上げには、苦心していた。そこで、Cの目や口元を鏡に映しながら、どの部分の色調を強めると表情が表しやすいかを助言した。また、ポイントとなる部分には暗い色や対照的な色を用いると表情がはっきりすることを参考作品を例に説明し、あきらめずに取り組むよう励ました。その後Cは、対照的な色を用いて目や口元を仕上げ、優しく生き生きとした表情を完成させることができた。

資料8 Cの自己評価表

自己評価表 3年()組()番 氏名()

実施日	学習の流れ	自己目標	成果・感想	自己評価	検印
10/20	彩色開始 明るい面に色をおく	緑色や青い色を 使う。	色づきがいいので、 いい。	◎ ○ △	印
10/24	暗い面を透明な 描法でとらえる	かげがさしあつて つくさずうらやま	かげがうすくあつて よかった。	◎ ○ △	印
10/31	中間の明るさの 表現(混色・重 色・技法の工夫)	混色や重色を使 っていい色と見せ	よくあつてよかった。 (中間の明るさ)	◎ ○ △	印
11/11	ポイントとなる 部分の描き込み	ポイントの部分 はよく描きこむ	ポイントの部分 はよく描きこむ よかった。	◎ ○ △	印
11/14	全体のバランス を整え、彩色を 完成させる	全体のバランス を整え、彩色を 完成させる	よかったです。	◎ ○ △	印

制作後、Cは、自己評価表の感想欄に、「自分なりにうまく行ってよかった。」(下塗り後)、「よくできたからよかった。」(彩色完成後)と記入し、自分の彩色に満足していることが伺える(資料8)。

Aは、下地に用いた渋い緑を人物の下塗りに使い、下描きの表情に合う落ち着いた配色を考慮することができた。下塗りによって大まかな色調と立体感をとらえたAは、中間の明るさをどのような技法で表現するか迷っていた。そこで、Aに対して、参考作品や実演をもとに、厚塗りの不透明水彩描法と薄塗りの透明水彩描法を紹介した。すると、Aは薄い色を何度も塗り重ねる透明水彩描法を選んで、根気強く表現し始めた。その後、Aの制作は、比較的順調であり、表情のポイントとな

資料9 Aの彩色完成作品



る目や唇の仕上げにも自信をもっていた。そこで、Aの主體的な学習態度を尊重し、教師の支援は、彩色の成果を認めたり熱心な取組を賞賛したりする形で行うようにした。

完成したAの自画像は、Aの外面的な特徴を優れた描写力で

とらえた作品となった。また、Aのイメージしていた「神秘的で創造力にあふれた自分」も、描かれた表情や色彩から伝わり、思いや願いを表現する自画像となった(資料9)。

制作後、Aは、自己評価表の感想欄に、「まだ塗り足りないけど、鼻や唇の立体感がよく表せたと思います。」と記入した。描写力のあるAは、まだまだ描きたいという姿勢を見せながらも、苦心して描いた部分の成果は認めていた。また、Aは、多くの友達に自分の作品のよさを認められ、自己表現の喜びを味わっていた。

以上のように、生徒たちは、下地や下描きを生かす配色を考え、観察をもとに水彩画の基礎技法を生かして彩色し、思いや願いを表現する自画像を制作することができた。特に、思いや願いの表現には、参考作品から配色の効果を実感し、表現意図を生かす配色を考えることが有効であった。

VII 研究のまとめと今後の課題

- 下地づくりにおいて、生徒は、楽しみながら自分の性格や気持ちについて考えていた。しかし、完成した下地の中には、シンボルマークを多用したプリクラ風の作品もあった。今後は、生徒がより抽象的な表現で自分の内面を表せるような指導を工夫していきたい。
- 題材の中に、自分を見つめる活動を取り入れることは、思いや願いを表現するために、有効であった。今後は、他の領域でも自分を見つめる活動を取り入れた題材を開発していきたい。